

# 新しい学習指導要領をこう読む

— 基幹教科としての役割と国語科で育てる言葉の力 —

## 鼎談

京都橘大学教授

甲斐睦朗

×

秋田大学教授

阿部昇

×

京都教育大学教授

森山卓郎

新しい学習指導要領が告示されました。

これからの時代に求められる学力とはどんな  
ものか。

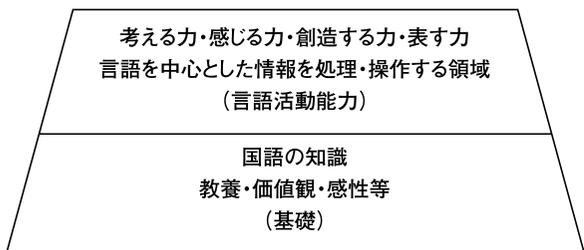
国語科が担う役割は何か。

新しい学習指導要領から見えてくるものを、  
光村図書小学校国語教科書編集委員の三人の  
先生方に語り合っていました。





図1



この二つの領域は、相互に影響し合いながら、各人の国語力を構成しており、生涯にわたって発展していくものと考えられる。  
(文化審議会答申「これからの時代に求められる国語力について」より)

### 国語力がすべての学習の基礎

**甲斐** 新しい学習指導要領を見て、国語科はほとんど変わっていないではないか、といわれることがあります。確かに、「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」という三領域は変わっていないので、そう思われるのかもしれませんが、実際は大きく変わっています。

**阿部** 総則の中に「言語に関する能力」が位置づいたという点が新しいし、評価できると思います。国語科はもちろんですが、それ以外の教科でも「言語」という観点を重視することで、より質の高い指導が可能になると思います。

それから、国語科の中でも、これまで「計画的に話し合おうとする態度」などと書かれていたものが、「計画的に話し合う能力」というように「能力」という言葉が前面に出てきたのも注目したいところです。

**森山** 「国語力」がすべての学習の基礎である、ということが改めて確認されたことの意味が大きいですね。新しい学習指導要領では、それが具体的な形でいろいろなところに表れていると思います。大きなところでは、言語活動が内容に示されたことと、伝統的な言語文化が入ったことなども注目されますね。

## 学校教育全体で言語力を育てることは、これからの社会に役立つ言語力をつけるということなのです。

—— 甲斐睦朗

学校教育の枠全体で言語力を育てるということは、社会に出たときに社会人としての言語力が定着するように力をつけていくということだと思います。しかも、これからの社会に役立つ言語力をつけていく、ということだと思います。

**甲斐** 今回の学習指導要領は、戦後初めて教育基本法が改正され、それに伴って学校教育法などの教育関連法が改正された後の最初の学習指導要領なんです。その学校教育法の第二十一条五項にも、「読書に親しませ、生活に必要な国語を正しく理解し、使用する基礎的な能力を養うこと」とあり、「国語」という言葉が出てきます。それから、第三十条二項では、「課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力をはぐくみ」とあります。これまで国語科の主要な育成目標に入っていたものが、学校教育全体での課題となつていくわけです。

**阿部** 「伝える力を高める」ということですね。これは現行の学習指導要領から継承されていますが、それぞれの領域の中でくり返して出てきます。台形の上下にあるこの二つの力を育成することがPISAの結果から見えた一つの課題であり、新しい学習指導要領でも大きく取り上げられている部分だと思います。ところで、昨年四月に実施された全国学力・学習状況調査(\*3)でも、PISA A型読解力

をかなり意識した問題が出されましたね。**阿部** そうですね。B問題がそれですが、例えば、二人の感想文を読んで「共通するよい書き方」を問う問題や、ごみを減らすために「あなたなら、どのような取り組みをしようか」というような取り組みをしようか」という設問などは、その典型と言えます。これまでまったくなかったわけではありませんが、国語科教育で弱かった部分が強調されているという点では評価できると思います。



甲斐 睦朗 (かい むつろう)

1939年台湾生まれ。愛知教育大学教授、国立国語研究所言語教育研究部長、日本語教育センター長、独立行政法人国立国語研究所長を経て、現在、京都橘大学文学部教授。中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会国語専門部会主査、文化審議会国語分科会委員。著書に、「わかむらさき—源氏物語の源流を求めて」(明治書院/1998年)、『文学教材の読み方と実際』(明治図書/1996年)など多数。

つ言語力をつけるということですね。このことは、国語科で育てる力の位置づけが質的に変わったということの理解として、押さえておきたいですね。

### PISAの影響

**森山** 今回の改訂をみると、PISA(\*1)の影響が強く出ているように思いますが、い

うと思いますか」という設問などは、その典型と言えます。これまでまったくなかったわけではありませんが、国語科教育で弱かった部分が強調されているという点では評価できると思います。

**森山** 秋田県はトップクラスの成績だったそうですが、何か特別なことをされているのでしょうか。

**阿部** 今、どうしてそうなったのかという分析をしているところです。いろいろな理由が考えられますが、自分の考えを話させたり書かせたりする授業、話し合いや意見交換をさせる授業がより多いということは、質問紙調査の結果を見ても間違いないようなんです。

まずは「間違っていないから自分の考えを書いてごらん、話してごらん。」とやって子どもたちに意見を出させ、先生が助言しながら話し合いの中で高めていく、という授業展開をしている先生方・学校が、秋田県は相対的に多かった。

それから、PISAで日本は白紙回答が多かったということですが、全国学力・学習状況調査で、秋田県の子どもたちは、とにかく自分の考えを書こうとしていました。無回答が低かった。今回の学習指導要領ともかかわって、とてもおもしろい結果ではないかと思えます。

**森山** なるほど。まさに「話し合うこと」と「自分の考えを出す」ことを大切にすること



践をされた結果だったわけですね。ちょうど、中央教育審議会の答申の中に「知識基盤社会」に対応するとありますが、これからの教育では、技術革新が進む中で、生涯にわたって学習を続けていくことが求められています。伝え合う力、自ら考える力、自ら学んでいく力というものが、これまで以上に大事になってくるわけです。

そういった学力観・教育観のある意味の転回点にわたしたちがいるということを考えれば、PISAにせよ、全国学力・学習状況調査にせよ、表面的な結果の点数にだけこだわるのではなく、社会に出たときに社会人としての言語力が定着するような学習をどう積み上げていくかということが大切だという気がしてきます。新しい学習指導要領でも、そうした根本をおろそかにしてはいけないういでしょうね。

### 増えた言語活動

**甲斐** 少し具体的な話になりますが、新しい学習指導要領では、領域ごとに言語活動例を設け、数も増やしています。それが、ア、イ、ウ、エと分類されて、例えば中学年のアを見ると、読むことでは「物語や詩を読み、感想を述べ合うこと。」で、書くことでは「身近なこと、想像したことなどを基に、詩

をつくったり、物語を書いたりすること。」というように系統性を重視している。これも大きく変わったポイントですね。

**阿部** 「新聞を読む」「伝記を読む」など、かなり具体的な内容になっています。「討論をする」「比べる」など、PISA型読解力の視点も、よく読むとあちこちにちりばめられています。中学校では、「評価」「批評」という言葉も出てきています。しかし、その要素は、もう少し前面に出してもよかつたのかな、とも思います。

**甲斐** 光村の中学校三年の教科書に、新聞の読み比べの教材「新聞の特徴を生かして書く」があります。同じ題材を扱った記事でも、新聞によって切り口が違う。そういう批判的な読みの視点をもってほしいですね。今、全国でNIE(\*4)の活動が広がっていて、とてもいいと思っています。新聞を読むのも、読書の一環ですからね。

**森山** クリティカル・リーディングですね。高学年の「読むこと」のイとカの二箇所「比べて読む」が出てきています。

新しい学習指導要領では「事実と意見」というところが現行のものに比べて強調されていると思います。新聞を読むという活動をするときにも、何が事実でそれがどう編集されているか、自分がどう思うのか、というように、しっかりとしたものを見方をつけていくこと

質に関する事項」が新設されました。中学年では文語調の短歌や俳句、また故事成語や慣用句という内容が、高学年では古典という言葉が出てきます。古来の日本人によって作られた「国語」をわれわれは継承して、文化的な蓄積を身につけていくことの必要性がいられているように思います。

**阿部** これ自体は、いいことだと思います。ただ、子どもたちがワクワクするような、おもしろいと思えるようなものにしていかなければならぬと思っています。訓詁注釈型の古典を小学校におろしてもだめです。古典作品のもつ豊かさ、おもしろさを発見させていく必要があると思います。

**森山** 今、古典を実践している全国の学校では、「声に出して読む」というところまで、という実践が多いようです。確かに、触れるという意味ではいいと思いますが、やはり意味がわかるということが大切だと思っています。訓詁注釈は必要ないにしても、まずはこういう意味なんだということを知って読むことも大切だと思います。

**阿部** そうですね。そんなに高度である必要はないですが、音読をしながら、ここはちょっと強く読まなければいけないとか、ここはこう区切るんだとかを考えさせていってほしいと思います。そのためにも、古典のおもしろさに気づかせることが大切です。解釈をしながら音読上の発見があったり、またその逆もあつたりするような授業構築が必要ですね。

**甲斐** 「伝統的な言語文化」にどのように触れさせるとよいか、ということが大切になってくると思います。音読だけで終わらない、しかし訓詁注釈型でもない古典の教材をどう構築するのが問われていると感じています。とにかく小学生が音読して朗読して暗唱して、大人になったとき、それがその人の人間性や人格を支える要素の一つになってくれるといいなと願っています。

### 言語そのものについて考える

**甲斐** 「指導計画の作成と内容の取扱い」2の(1)ウ(イ)には「当該学年より後の学

が問われます。言語活動例が具体的にわた分、その活動の中でどういう力をつけるのか、というところをしっかりと押さえていく必要があります。

**阿部** おっしゃるとおりです。例えば、グループで話し合わせればいいんだと思って、たくさん話し合わせる。そこで意見を述べ合って、「いっぱい話し合えたね、みんな意見を出して合えてよかったね。」で終わってしまう危険がある。でもそうではないのです。やはり大切なのは、その活動でどんな力をつけるのかという教師側の方略です。それがなければ、一体何を学んだのかわからないという授業が生まれてしまう。身につけたい言語能力が明確になってきた分、それにかかわる教科内容の具体化、体系化、系統化ということが重要です。

学習指導要領はあくまでも要点にすぎませんから、国語教育にかかわっているもの全員で、今までは違う新しい発想や、表層だけでなく深層にまで立ち入るような具体的な教科内容を構築していく必要があります。その中でも文章を吟味し評価する力はきちっと位置づけていかなければならないと思います。

### 音読を超えた古典の学習を

**甲斐** 今回、「伝統的な言語文化と国語の特質」に配当されている漢字及びそれ以外の漢字については、振り仮名を付けるなど、児童の学習負担に配慮しつつ提示することができるとあります。これは交ぜ書きをなくしていくということもありますが、小学生でも常用漢字が読めるようになれば、新聞や中学生の読み物などに臆せず正面から向かうことができるようになるということがあるのです。

身につけたい言語能力が明確になってきた分、教科内容の具体化・体系化・系統化が重要です。

阿部 昇



阿部 昇 (あべのぼる)

1954年東京都生まれ。茗溪学園中学校・高等学校教諭、秋田大学助教授を経て、現在秋田大学教育文化学部教授。秋田大学教育文化学部附属小学校校長。専門は文章吟味力の指導に関する研究、メディアリテラシー教育、文学作品・説明的文章の読み方教育。著書に『文章吟味力を鍛える-教科書・メディア総合の吟味』(明治図書/2003年)、『授業づくりのための「説明的文章教材」の徹底批判(授業への挑戦)』(明治図書/1996年)ほか多数。



活動が表面的なものにならないためには、「方法への意識」が大切だと思っています。

—— 森山卓郎



森山 卓郎（もりやま たくろう）

1960年京都府生まれ。大阪大学文学部助手、講師、京都教育大学教育学部助教授を経て、現在京都教育大学教育学部国文学科教授。専攻は日本語文法。日本語の奥にあるもののとらえ方や、日本語でのコミュニケーションのあり方などの観点から日本語文法を研究。著書に、「言葉」から考える読解力—理論&かんたんワーク」（明治図書／2007年）、『コミュニケーションの日本語』（岩波書店／2004年）ほか多数。

森山 おっしゃるように、そういう漢字というのは、基本的に語単位でとらえるべきものですから、一部の漢字だけを平仮名にするとかえってわかりにくくなります。社会で生きて働く力になるという点でも、理解を深めるという点でも、今回振り仮名を付ける表記になることは非常に大きいことだと思います。

甲斐 それから、「メタ言語」（\*5）「メタ認識」という言葉を国語教育でぜひとも使っていきたいと思います。小学校一年に、「ものの 名まえ」という教材があって、果物屋さんに行ったり魚屋さんに行ったりします。魚屋さんで、けんじくんが「さかなをください。」と言ったら、おじさんが笑って「さかなじゃ わからないよ。」というのです。魚屋にはタイやサバなどたくさん魚があります。いわゆる上位語、下位語の関係です。「メタ言語」という言葉こそ使っていませんが、こういうところからメタ認識が展開しているわけです。

阿部 全国学力・学習状況調査の問題にも、

大切ですが、下の土台になっている部分にある、活動を支えるための知識・技能なども必要不可欠な力です。特に読書活動は土台の部分を柔軟に、幅広く奥行きのある状態に、つまり分厚くしていきます。そのためには多面的にいろいろな本を読んできなくてはなりません。それを支えとして、上部の思考力、表現力も高めていきたい、という考え方だと思います。

阿部 まず下支えになる部分があつて、活用力が高まる、ということはあると思います。が、活用しながら、下支えのこの部分が足りなかつた、ということが見えてきたりもします。おそらく両方が相まって、行ったり来たりしながら高まっていくのだと思います。

甲斐 そう思います。「指導計画の作成と内容の取扱い」に、図書館の利用について、「本の題名や種類などに注目したり、索引を利用して検索をしたりするなどにより、必要な本や資料を選ぶことができるように指導すること。」と記されたところがあります。自分で求める本を探せるようになるという、これは読書において大きな力になるわけです。阿部先生がおっしゃったように、活用力を高めることによつて土台ができてくる、ということがあります。まず土台ありき、と考えるのではなく、主体的に書くことや、読むことに積極的に向かつていくということが大切だと思っています。

書かれていることを対象化して、メタ的に解読したり評価したりするような問題がありました。言語力育成協力者会議で、小学校英語でメタ認知力をつける、という議論がありました。したが、国語でこそつけていきたい力だと思います。

森山 言語に対するメタ的な考え方はとても大事だと思っています。言葉についての意識を高めることで、実生活でも役に立つような思考力や表現力を培うことができると思います。

国語の学力を構造化してとらえる

森山 国語の学力には一定の構造があります。漢字が読めないとか、文の意味がわからないということになるとどうしようもないですから、まずは基盤の学力というものがどうしても必要になります。次に、関連性のあるポイントを記憶しておくとか、相手がどういうことを言いたいのかを予測する、といったコミュニケーションの場での文脈の力が大事になると思います。それから、さらにそれを

多様な活動と方法知を

甲斐 言語活動例は、各領域への関連がともよく系統づけられていますし、全学年を通して見たときも、体系的に位置づけられていると思います。今後は、それを押さえた上で、具体的につけたい力を明確にしていく必要があります。実は現行の光村の教科書でも、その系統性・体系化はほぼ十分に意識されているのです。でも、それをさらに明確にしていく必要があるということですね。

阿部 もちろん現行版の教科書でも意識されていることですが、それがなおいっそう明確になってくると思います。学年内だけでなく学年間、小学校全体にまで目を配ることが大切になってきますね。小学校一年から中学校三年までの九年間を見通した教科内容を、知識と方法を中心として系統化することを考えなくてはならない。だから、先生方がしなければいけないことは、きつと増えると思います。ですが、ぜひ楽しく豊かで発見のある国語の授業を方略的に準備し、これからの世界を生きていく子どもたちに、本当の意味での国語の力、言葉の力を育てていただきたいと思っています。

甲斐 本当にそうですね。「こんぎつね」でいうと、例えば5の場面は兵十と加助の会話で、お寺に行くまでは兵十が多弁で、帰りは

加助が多弁だったとか、それぞれの場面がどんな構成になっているのか、また六つの場面がどんなふうにつながっていくのかといった内容分析ができるようになってくると思います。

自分とのかかわりの中で思考していく、あるいはアウトプットしていく力も大切です。その三つの段階を押さえた学習が、新しい学習指導要領では、それぞれの領域の中で、具体的な活動という形で示されていますね。

甲斐 そうですね。先に述べましたけれども、国語力を台形でもらえています。上のほうの、思考力、表現力などの言語活動能力も

阿部 おっしゃるとおりですね。「こんぎつね」は、1から5の場面が、6の場面への布石・仕掛けになっているんです。例えば、導入部分で登場人物の紹介をしているのは、それがあとで生きてくるからなんです。それから、ごとと兵十の関係がどう変容していくかがおもしろい。ごんは兵十に対する見方を変えていつているのに対し、兵十は相変わらずぬすつときつねと思っていて、そのすれ違いがどんどん広がっていく。いろいろなところに仕掛けがあるわけです。でも、それを仕掛けとして読む、という観念の指導は意外と少ない。単に心情だけを追いかけるのではなく、作品の書かれ方、仕掛けにアクセスしながら読むことができるようになってほしいと思います。

森山 「読む方法」を身につける、ということですね。「読むこと」に限らず、どの領域でも、活動が表面的なものにならないためには、「方法への意識」が大切だと思っています。読み取りの場合にはどんな方法があるのか、書く場合は具体的にどうしていけばいいか、といったことですね。国語は、これまでのや



り方に固執してはいけません。どういう力をつけるのか、そのためには何が必要か、といったことを具体的にしっかりと押さえていかなければならないと思います。

**阿部** 「読む方法」、そして「書く方法」「話す方法」「聞く方法」を国語科の教科内容として大切にする必要があります。そのためには、やはり言語活動が大事ですね。これまでのような問答型・一問一答型ではない、子どもたちの話し合いや学び合い、討論を豊かに仕込む授業をしていかなければ、方法は身につかない。本当の意味での学力向上には限界がある。ただ、活動主義に陥らないように注意しつつ、周到に準備することが重要だと思います。

**甲斐** 国語科には、目的が二つあります。一つは、文学作品を読むとか文章を書くといった、その人の人間性や人格という内面的な成長にかかわる学習で、国語科独自のものだと思います。もう一つが言語力を身につけることで、これは学校教育の枠で伸ばしていくかなければならない部分だと思います。この二つの目標が相反しない形で融合することが、国語科のいちばん理想的な姿だと思っているのです。その上に、豊かな国語の授業が成り立つのだと思います。

先生方には、新しい学習指導要領を正しく理解してほしいと思います。正しく理解する

### 【用語解説】

#### \*1 PISA

Programme for International Student Assessment (学習到達度調査) の略称。OECD (経済協力開発機構) が二〇〇年から三年ごとに行っている、義務教育終了段階の十五歳の生徒を対象にした学習到達度調査。読解力・数学的リテラシー (＝知識・能力) ・科学的リテラシーの三分野について調査する。これまで、二〇〇〇年・二〇〇三年・二〇〇六年の三回、調査が行われており、二〇〇〇年は読解力に重点が置かれた。我が国は、第一回の二〇〇〇年から参加しているが、調査結果は回を追うごとにスコア・順位とも低下の傾向にあり、「学力低下」論議の契機となった。

#### \*2 PISA型読解力をどう向上させるかという議論

PISAの結果は学力低下の証拠として大きく報道され、文部科学省では、「読解力向上プログラム」をまとめ、教科の枠をこえた学校の教育活動全体を通じてPISA型「読解力」の向上に向けた取り組みを積極的に進めていくことを表明した。また、中央教育審議会教育課程部会では、人間力の向上を図る教育内容改善の基本的考え方として、言葉や体験などの学習や生活づくりの重視が提言さ

ために、全体がどういう構成になっているか、また、系統的にどうなっているかをつかんでほしい。例えばひとつの領域の言語活動例のAでもIでもよいのですが、それを低、中、高学年の順に見ていくだけで、全体がどのような扱いになっているかがわかってきます。そのうえで、この言語活動例について、今の教科書の単元や教材を材料として、学習指導の略案を考えていただきたいと思っています。

最後に、国語の授業は、(1) 学習指導要領、(2) 教科書、そして、(3) 教室の学習者の三者への配慮によって、よりよい授業に改善されます。教科書は学習指導要領の考えに立脚して編集されていますが、それでも各教室で学習指導案を作成される際は、先生方もまた学習指導要領の各事項をひもどく必要があります。教室の一人ひとりの学習者の顔を思い浮かべて、全員が残らず十全な学習ができるよう、楽しく活発な授業案の作成に向かっていたいただきたいものです。

れ、子どもの発達段階に応じた教科等を横断した言語力について検討する「言語力育成協力者会議」が設置された。

#### \*3 全国学力・学習状況調査

日本全国の小学六年生・中学三年生を対象として行われるテストのこと。テストは算数・数学と国語の二科目で、それぞれ主として「知識」に関する問題 (A) と主として「活用」に関する問題 (B) の二種類に分かれている。特に「活用」をテーマとしたB問題については、実践的な問いに対しての対応力が必要とされ、普段の学習の中で疑問に感じたことを納得できるまで考えたり、さまざまな角度から問題を解く方法を考え、自力で解決できる訓練を積んでおくことの重要性が求められた。また、国語では「記述式」の問題が多く出題され、「端的に文章をまとめる」とことや、「要点を人に伝える」などの表現力が求められた。また、同時に、児童・生徒の学習・生活環境について問う質問紙調査も行っている。

#### \*4 NIE

NIE (エヌ・アイ・イー) は、Newspaper Education (教育に新聞を) の略称。学校等で新聞を教材にして勉強する学習運動のこと。一九三〇年代にアメリカで始まった。



日本では、社団法人日本新聞協会が教育界に協力する形で、一九八九年から組織的な取り組みを始め、一九九八年に財団法人日本新聞教育文化財団に移管、二〇〇〇年十月には横浜にNIE全国センターを開設し、NIEを推進している。新聞を授業に活用することで、児童・生徒らの学習意欲が高まり、積極的な学習態度が身につくとして注目されている。

#### \*5 メタ言語

言語自体を論じる言語のこと。言葉を使って、言葉について考える能力を「メタ言語能力」という。ここでは、言語そのものを対象とした思考や学習内容について言われている。